やっぱり、9条でいこうよ！

まさか!この歳で「着ぐるみ」を着ることになるとは、まさに想定外。どうなるやら・・と不安をよそに、これまた着てみると実に楽しいもので、童心に返って着ぐるみ状態で部屋中をはしゃぎまわった挙句、しまいにはそのまま外に遊びに出て行きたい気分にかられる。実に爽快!?な体験をした。と愉快な話はさておき、この着ぐるみ軍団が何をお伝えしたかったのか・・

昨年の8月13日、沖縄県の普天間で大学敷地内に米軍ヘリが墜落した。また、沖縄の普天間基地移設問題で沖縄北部の辺野古では住民らの反対運動で防衛施設局を相手に座り込みが450日以上となり、熱い戦いが繰り広げられている。昨今、アメリカ本土にある陸軍司令部が神奈川県キャンプ座間に移転される計画や、沖縄駐留の海兵隊員をキャンプ富士とキャンプ座間に分散させる計画などが浮上してきており、アメリカが朝鮮半島から北東アジア、中東までを不安定の弧として位置づけていることを伺わせるが、それに伴ってアメリカの軍事再編成計画は、ますます日本を軍事拠点化する方向で動いている。もはや基地や平和問題は日本全土をまきこんだものとなり、沖縄だけの問題ではなくなっている。

九州弁護士会連合会は、沖縄のヘリ墜落を契機に憲法９条を考える平和のシンポジウムを福岡市で開催する。ヘリ墜落当時の生々しいビデオ映像に加え、九州各県の一般市民から集めた約2000通のアンケート結果を踏まえてシンポジウムをおこなう。平和問題は私たち全ての問題であることを共有したい。

ところで話は戻るが、着ぐるみ軍団は、暑い中、熱い気持ちで着ぐるみ撮影に臨んだ…とそこまではかなり格好いい。がしかし…とにかく、着ぐるみは暑い!息ができないほど汗臭い!着ぐるみの頭は異常にでかくて重い!でも、着ぐるみ軍団は、これにへこたれず、メッセージをたずさえて明るく撮影を終了した。

■みなさんといっしょに環境や社会の問題を考え、紙面を作っていきます。

東風 No.11

●発行日　2005年8月1日
●発行所　小倉東総合法律事務所
●編集者　荒　牧　啓　一
●連絡先　〒802-0062 北九州市小倉北区
片野新町2丁目12番21号
朝日センタービル２階
TEL093(932)5575
FAX093(932)5600
e-maii:ponpoko@lime.ocn.ne.jp

市民の挑戦

曾根干潟を子どもたちに残すために
ラムサール条約湿地に登録を

弁護士会が保全にとりくみ

東風の創刊号で、曾根干潟のカブトガニの記事を書きました。１億5000年前の化石が発見され、「生きている化石」と言われているカブトガニ、そんなすごいカブトガニの日本最大の生息地の曾根干潟が危機に瀕している。これからも子どもたちと一緒にカブトガニを見るためにも曾根干潟の守ろうと訴えました。

2006年３月、新北九州空港が開港します。北九州市は、現在の空港跡地の利用の基本構想の中で、曾根干潟を「環境調和エリア」と位置づけ、保全に配慮した跡地開発に努めるとし、隣り合う「オープンスペースエリア」は公園などいこいの広場として整備すると発表しました。曾根干潟は、いろんな個人や団体が、それぞれの立場から保全の運動をしています。市の発表は、それらの運動の成果です。

弁護士会の公害環境委員会は、曾根干潟をラムサール条約上の登録湿地として登録するよう研究・運動しています。そのためには、北九州市が積極的に保全措置を講じ、更に国に対して、例えば国設鳥獣保護区に指定するなどの保全措置をとるように働きかけることが必要になります。勿論、地元住民、漁業・農業関係者の理解・協力も。

そんな訳で、昨秋、久しぶりに、曾根干潟に行きました。ズグロカモメが数羽、干潟で歩きながら餌を啄んでいました。ズグロカモメは、世界中の成鳥総数が 7000 羽とされる国際的に絶滅の恐れのある渡り鳥です。全身灰色で、くちばしが黄色のアオサギも見かけました。干潮で、潮の引いた干潟には、トビハゼが泥の上を跳びはねて移動する姿がユーモラスでした。ゴカイやカニなども、うじゃうじゃ?いました。

曾根干潟は未来に残すべき財産

干潟は、さまざまな生き物が生活しており、海洋環境の中では、一番物質の循環が盛んな場所で、天然の浄化槽とも言われています。なかでも、二枚貝やゴカイなどの底生動物が浄化に役立っているのです。二枚貝は、水中に浮遊するプランクトンなどの有機物を餌にし、この有機物の一部がフンとして干潟に積もると、ゴカイやカニなどが餌にするのです。こうして、自然の浄化作用により、きれいな環境が保たれています。干潟の生態系は、バクテリアによる有機物などの分解、プランクトン・底生動物・魚介類・鳥類などの食物連鎖によって守られ、私たち人間も海からの恵みを食物とすることで、生態系の一員になっています（曾根干潟の生きもの―北九州市―より）。

曾根干潟は、現在は約 500ha. で，アシ原・泥・砂泥・砂・小岩・磯・タイドプール・島・後背の田畑を抱えています。底生動物は希少種だけでも 60 種以上です。諫早干潟が「消滅」してからは、河口域にやってくるズグロカモメなど希少な水鳥の日本最大級の越冬地でもあります。カブトガニや絶滅したと思われていたワカウラツヅキ（二枚貝）、なども生息しています。

干潟は太陽エネルギーで動く天然の浄化槽であり、私たちの祖先が残してくれた貴重な財産です。諫早の例を挙げるまでもなく、一度失われた干潟を再生することは本当に難しいのです。干潟の保全と農業・漁業の発展、住民の暮らしとは、矛盾しないはずですが、まだまだ検討が必要なようです。まず、干潟に行って見ましょう!。

（写真は北九州市発行のパンフレットから）

information information information

新鮮情報

「ひがた　だいすき!」
くすだ　ひろこ 作・絵
西日本新聞社

福岡の和白干潟を、「美海ちゃん」の目を通して、やさしい風合いの「きりえ」と穏やかな文章で紹介する絵本。「海水がしずかにひいたりみちたりする和白干潟が　世界中の海につながっていると思うと、美海はうれしくなります」。そう、和白干潟も曽根干潟も世界の海に、世界の生態系につながっているのです。

作者は和白干潟を守る会代表をつとめる。

「障害者問題研究　vol31.№4
特集 障害者の人権保障と法的問題」
全国障害者問題研究会

2003年に障害者支援費支給制度が始まり、障害者の生活不安が高まる中で、ようやく国内でも「差別禁止法」に関する議論が緊急、重要な課題となってきている。しかし、真の障害者の「完全参加と平等」を実現するためには、性急な差別禁止法づくりに対しては慎重に、いまこそ今日の障害者の人権状況の点検作業を行い、そのことが21世紀を真に人権の世紀へと変革していくことに結びつくという基調認識の下、各方面からの論点と素材が盛り込まれた論文集である。

「オンブズマンレポート　患者の権利」
患者の権利オンブズマン
全国連絡委員会編

問われる医療のあり方。その中で「患者の権利」を座標軸に、「苦情から学ぶ医療を」と、患者の生の声、苦情、体験をケースごとに整理し紹介。医療・福祉サービスのあり方を原点に立ち返って考えさせる、生きた教材とも言うべき書。

ＤＶＤ　35年目の横井久美子
「歌にありがとう」

筑豊じん肺訴訟をうたで応援をし続けてこられた横井久美子さんの 35 周年記念コンサートをおさめたDVD。最高裁判決の日、原告団とともに喜びを分かち合うシーンも納められている。

♪歌って　愛して　夢をみながら闘いたい　あなたと♪と力強く暖かい歌声が心いっぱいに響き渡る。

尚、DVDの収益はベトナムの枯葉剤被害者救援に寄付されるとのこと。

問合先　横井久美子事務所
〒186-0002 国立市東 3-18-15
TEL　042-573-3465

●みな様からの暮らしの智恵やおもしろ情報、お勧めの書籍など、どしどしお寄せ下さい。

香典がえし

葉　山　　隆

1934年北九州市生れ。早大大学院卒。産業医科大学医聖会（献体の会）会長。こうじゃく9条の会々員。好奇心旺盛。駄じゃれ得意。八幡西区在住。

春の終りから空梅雨の蒸し暑い季節にかけて、三人の親しい方々を見送った。加齢とともに彼岸が一段と身近かなものになってきた。朝刊を開くと一番に死亡欄に目がゆく。

いつのまにか冠婚葬祭業が大きな産業になってしまった。どこの結婚式場もクリスチャンでない人たちのために派手な「礼拝堂」を併設している。僕の家から車で七、八分の距離に、四ヶ所も目立つ建物の葬祭場ができた。

結婚を祝う。死者を弔う。人生にとって掛け替えのない行事なのに、業者の過剰な仕掛けや演出で厳粛な気持ちをそがれることが多い。そこでは、ごく近年に思いついたアイディアがいかにも昔ながらの伝統であるかのように見せかけられ、売上げの手段に使われる。

最近は仲人抜きの挙式が主流のようだが、少し格式ばった婚礼では仲人は重要な役どころになっている。民族学者和森太郎によれば、古来、結婚に際し双方に異論のない時は仲人を立てず、式を執り行う仕来りだったという。神前結婚が一般的になったのもそんな古いことではない。明治の後期、食うに困った東京大神宮の考えたアイデイア商売だ。

あの気忙しい披露宴のお色直し。元来、新婦が白無垢で嫁入りし、祝儀の後に新郎側で用意した白でない衣装に着替えることから『色を直す』と表現された。数回の和洋の『お色直し』など貸衣装屋の考え出した演出で、高価なお遊びに過ぎない。

突然の訃報に、香典をいくらお包みするか、いつも夫婦で少し頭を悩ます。新札がふさわしいかどうかも。

僕は以前から不幸ごとの「お返し」は不自然だと思ってきた。なんでも、昭和の初期に日本橋の大手デパートが商品化し、作法読本にものせて、全国に普及させたとのことだ。

『簡素』の精神は日本文化のすばらしい伝統の一つだと思う。この気持ちで、物に満ちあふれた生活や過剰気味の行事や行為を見直したいものだ。

「香典がえし」が必要なら故人の人柄が偲ばれる心のこもった礼状をいただければ充分だと。いつも強く感じている。